話題

リニューアルオープンした「なら仏像館」

当館学芸部上席研究員　岩田　茂樹

一年半の間、休館していた「なら仏像館」がリニューアルオープンした。初日の四月二十九日朝には、開館を待つ七十人ほどの人々の列ができた。オープンを心待ちにしておられた方が多かったのだなとあらためて思う。が、待っていただいた価値はあったのではないかと、ひそかに考えている。内覧会にご招待したお客様の評判も上々であった。

今回のリニューアルで変わった点は少なくない。まず、なら仏像館中央の大きな三つの展示室（第6・7・8室）は、ケースをすべて撤去し、等身大以上の大型の仏像を、ガラス越しではなく直接見ていただけるようにした。展示台はいずれも免震機能を備えている。また作品との距離については、セキュリティーの観点から許されるぎりぎりの近さとなっているはずだ。作品表面の肌合いをまじかに感じとっていただきたいと思う。小さな作品については残念ながらガラスケースに入れざるをえないが、高透過ガラスに低反射フィルムを貼付したことによって、ここでもリアルな鑑賞が可能になっているはずである。

次の変更点として、照明設備を一新したことがあげられる。仏像のような三次元的作品の場合、その立体感を出すためには、ある程度高い位置からのスポット照明が必須である。

しかし、なら仏像館は、明治の近代洋風建築として貴重な建造物であり、重要文化財に指定されている関係上、むやみにボルトを打ち込むこともできず、建物内部に構造物を設けることはかなり困難であった。今回、設計事務所から提案され、協議の結果採択されたのは、次のような方法であった。まず建物の内壁とは別に、壁を立ち上げ、これを上部に幾つも渡した梁（はり）で固定する。この梁は同時に天井からの照明をやわらげるルーバーとしての役割をになうとともに、梁及び壁の上面から上向きの間接光を照射することにより、建築細部に施された彫刻をお見せすることもできるようになった。さらに、梁を利用してダクトコンセントを設置し、ここから作品に対してのスポット照明を行うことが可能となったのである。

ルーブル美術館ランス別館

このような方式の発想のヒントとなったのは、二〇一二年十二月に開館したフランス・ルーブル美術館ランス別館であった。建築設計は日本人が手がけている。ただしランスの場合は、壁も梁もすべて金属製であり、展示室内はややメタリックな輝きが充溢（じゅういつ）している。なら仏像館ではこれを木胎（もくたい）に桜色の顔料（がんりょう）を混ぜた漆喰（しっくい）を左官の手仕事で塗る仕上げとしており、光をやわらかく吸収し、室内をあたたかな空気で満たす効果を発揮しているように思われる。どちらを好むかは人それぞれだろうが、木彫を主体とする日本の仏像の展示のためには、今回の選択が正解であったのではないかと考えている。

天井照明、間接照明、そしてスポットライトはすべてＬＥＤを採用した。調光

可能なLEDスポットが発売されるタイミングに恵まれたのも幸いであった。けっして完全なものではないが、これまでの日本の仏像展示のなかでは、かなりレベルの高い照明を行いえたのではないかと自負しているのだが、如何であろうか。

なら仏像館第6室展示風景

一人でも多くの方にご来館いただき、検証していただきたいと願っている。

さて、なら仏像館の最後の展示室である第13室北側の壁ケースには、当館の所蔵する一〇〇点余りの仏像のパーツを並べている。いずれも破損した仏像の手先、足先、着衣や、光背、台座の一部、あるいは装身具などである。木造や銅造もあれば乾漆造や塑造もあり、また時代的には飛鳥時代から鎌倉時代に及ぶ。なかにはあの寺のあの像の一部ではないか、などと想像されるものもあるのだが、確定はなかなか困難である。なおこれらの伝来については詳細不明ながら、廃仏毀釈による明治初頭の仏教寺院受難の時期に流出したものらしい。想像をかき立てられる、見飽きないコーナーとなったので、是非ご堪能いただきたい。

【表紙写真解説】

忍性菩薩像

絹本著色
縦一二一・二cm　横四九・六cm
鎌倉～南北朝時代（十四世紀）
奈良・西大寺

良観房忍性（一二一七～一三〇三）を描いた掛幅である。払子を手に執り、法被を掛けた椅子に坐す姿を表す。前の机には戒尺・柄香炉・三衣包といった、通常受戒などの法会に用いた仏具を並べているため、本品はそのような法会に懸ける御影であったと考えられる。やや突き出た頭頂部、目尻の下がった目元、そして赤く分厚い鼻先は、各像に共通する、忍性のトレードマーク。柔和な表情は、慈悲に深かったというその心をしのばせるようだ。

伊藤久美（当館学芸部研究員）